特集　中学生・高校生の新聞活用教育に迫る

自分と社会の幸せを作り出す　新たな時代の学びを追究（全3回）

新渡戸文化中学校・高等学校（私立・東京都中野区）

「幸せ創造者」を育てる学校

国際的な政治家、農学者、そして教育者として活躍した新渡戸稲造を初代校長に持つ、新渡戸文化中学校・高等学校。２０２７年に創立１００周年を迎える伝統校だ。創立時は女子校だったが現在は共学化し、またここ数年は大胆な教育改革を進めている。

変化の激しい社会を生きていくには、大学進学実績ありきの教育改革ではなく、自ら学ぶ目標を見つけ、自ら学び続け、社会課題の解決に笑顔で向かえる生徒を育てていきたいと考える。その生徒像を同校では「Happiness Creator（幸せ創造者）」と呼んでいる。これは、新渡戸が残した言葉『自分が生まれてきたときより死に至るまで、周囲の人が少しなりともよくなれば、それで生まれた甲斐があるというものだ』に由来し、この言葉を体現するような人物に育ってほしい、という同校の願いがある。

幸せ創造者に成長するために必要な力を養う同校の「３Ｃカリキュラム」は、従来の教科観や学習観とは一線を画すものとなっている。

３Ｃの一つ目、「基礎学習（Core Learning）」は教科学習の基礎力を養うもの。ＡＩ（人工知能）を活用した個別最適化された学習で確かな知識や技能を身に付ける。

二つ目の「教科横断学習（Cross Curriculum）」は、複数の教科を関連付ける形で、自分の興味関心を深めていく探究学習だ。多くの学校は平日に数時間を充てることが多いが、同校はどの学年も水曜日をまるごと探究に充てている。「教科を横断して、世の中に新しい価値を提案していくようなプロジェクト型の教育をカリキュラムの中心に置くことにしました」。そう話すのは山藤旅聞高校副校長だ。

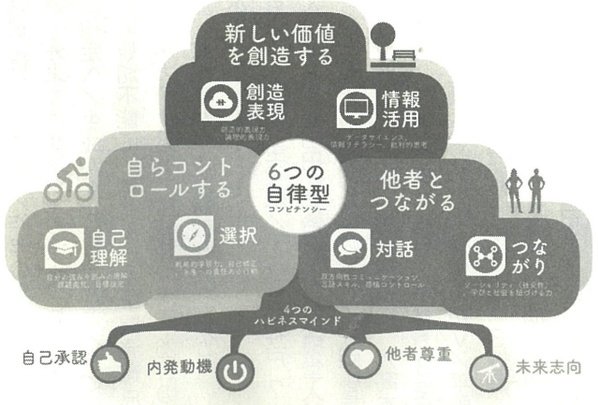
教科横断型学習の発展形として、三つ目の「価値創造型プロジェクト学習（新渡戸式・探究学習）」は、一人ひとりのそれまでの学びや問いからスタートし、社会課題に挑戦する。

「中高6年間で多彩な大人に会い、多彩な価値観に出会って、探究型のプロジェクトを自分で作り上げる経験を重ねていけば、自らをコントロールする力、他者とつながる力、新しい価値を創造する力を育てることができるのではないかと考えています」（山藤副校長）。

自律的な学習者を育てたい

３Ｃカリキュラムに基づく教育活動で、生徒が得る資質や能力「コンピテンシー」はどのようなものをイメージしているのだろうか。

同校は「自らコントロールする」「他者とつながる」「新しい価値を創造する」という３つのコンピテンシーを掲げる。それを細分化し、「自己理解」「選択」「対話」「つながり」「創造表現」「情報活用」の６つの具体的な力を示し、その育成を全ての授業の目的としている《図》。



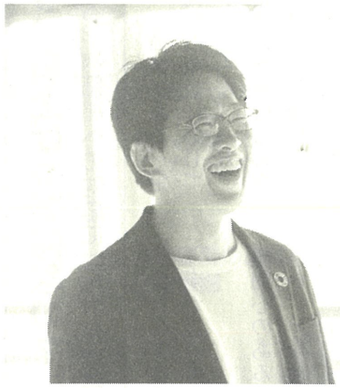
図＝同校が育成する力を示した「コンピテンシーツリー」

こうした力が伸びていくには、試行錯誤や失敗体験、さまざまな葛藤は避けて通れない。同校は「心理的安全性」を確保し、生徒が自分らしさや、自己肯定感などを感じながら、再びチャレンジできる学校風土を大事にしている。「自己承認」「内発動機」「他者尊重」「未来志向」の４つの「ハピネスマインド」は、教職員が強く意識していることだという。

問いを持つきっかけとしての新聞

同校では教員のことを「教育デザイナー」と呼ぶ。これは「装飾」という意味ではなく「目的を達成するための道筋を構想する力」のこと。生徒自身が主体的な学び手となり、生き方のデザインができる人になるよう、カリキュラムや授業などを設計する担当者、という意味だ。

ただ、学ぶといっても方法は多様だ。教科書や本物から学ぶこと、また実社会から学ぶこともある。探究をしたい「問い」持つにしても、自分個人のレベルから、対話を通して抱く疑問もある。社会に投げかける「問い」を見出すことは、社会課題の掘り起こしにつながる。そして問うだけでなく、そこから新たな価値を創造し、解決に向けた発信ができるかどうかも大切だ。同校の教員はこうした学び方をサポートできたかを常に意識しているという。



山藤旅聞副校長

新聞を活用した授業や活動はこの「問い」を作るのに大いに役立っている。多くの教員が新聞をきっかけに生徒の興味や関心を広げ、新たな疑問を持たせる糸口にしているという。「新聞を〝窓〟にして、問いを作ったり、提案を考えたりできますし、生徒による取材や新たな提案のきっかけにもなります」（山藤副校長）。

実際、新聞記事を出発点としてさまざまな探究学習や、社会課題解決のプロジェクトが進行中だ。ただし、日ごろから社会に関心を向け情報収集し、考え、行動に移す主体性は一朝一夕には育たない。日々新聞に親しみ、目を通す習慣や、記事から自問自答し、対話を通してさまざまな考え方に触れる時間が必要だ。次回は同校の新聞活用のキーマンである国語科の高橋伸明教諭の実践から、そのポイントを探りたい。

図書館の一室に設けられたライブラリーラウンジ

編集・取材　長尾康子
新聞活用教育の実践校を取材させてください。実際に取材にお伺いさせていただき、その後掲載校として誌面で特集します。詳細は弊社までお気軽にお問い合わせください。